

調査結果の概要

■ 平成30年度の成果

- 釧路湿原の保全上の問題を知るために、釧路湿原自然再生事業における既存知見の収集・整理を行った結果、大雨時の出水(例:H28.8)に伴う土砂流入が大きな問題となっていることが分かった。
- 釧路湿原における大雨の頻度および強度の変化を評価するために、釧路川中流部に位置する標茶地点における、現在および21世紀末の30年確率降水量を比較した結果、現在では180 mm/2日間程度であるのに対して、21世紀末(NHRCM、RCP8.5)では220 mm/2日間程度(約1.2倍)となることが分かった(図9)。
- 釧路湿原への土砂流入量変化を評価するための準備として、標茶地点における大雨の強度とその直後の釧路川の流量との関係式を観測データから求めた結果、年最大2日間降水量が1 mm増加する毎に、その直後の日流量が1.1 m³/s増大することが分かった(図10)。

■ 明らかとなった課題

- 釧路湿原の持つEco-DRR機能を評価するために、現在および21世紀末の大雨時における釧路川流域の水循環シミュレーションを実施予定であるが、両者の結果を比較できるように、21世紀末の大雨を想定する必要がある。

■ 平成31年度の調査計画

- 釧路湿原の持つEco-DRR機能を評価するために、21世紀末の大雨時における釧路川流域の水循環シミュレーションを実施する。また、その結果を利用して、釧路湿原への土砂流入量変化も評価する。
- 釧路湿原の上流に位置する未利用地による土砂捕捉効果を評価するために、現地調査を実施する。
- 影響評価結果および現地調査結果に基づき、Eco-DRR効果の向上および土砂流入の抑制のための適応策を検討する。

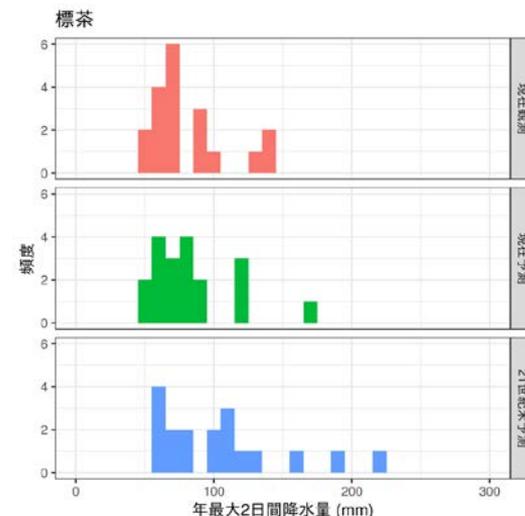


図9. 現在および21世紀末(NHRCM、RCP8.5)の大雨の比較(標茶)
出典: 日本エヌ・ユー・エス(株)作成

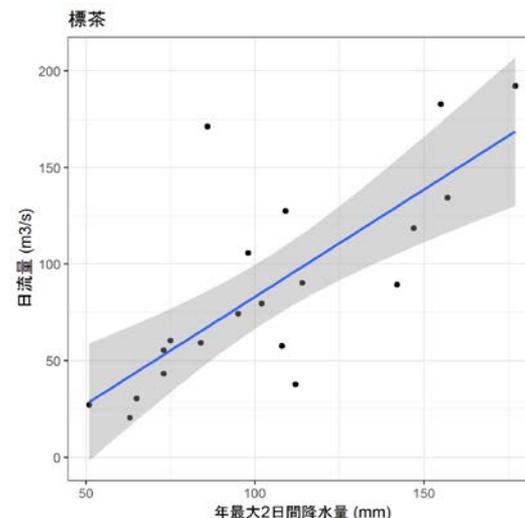


図10. 観測データから求めた大雨の強度とその直後の流量との関係(標茶)
出典: 日本エヌ・ユー・エス(株)作成

※2日間降水量とは、連続する2日間の総降水量である。